

貧困をひらく : チリ・サンチャゴ市のスラム住民の 暮らしと貧困克服計画をめぐる

内藤, 順子
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2338973>

出版情報 : 九州人類学会報. 31, pp.56-62, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

貧困をひらく

—チリ・サンチャゴ市のスラム住民の暮らしと貧困克服計画をめぐる—

内藤 順子

(九州大学大学院)

I. はじめに

貧困地区¹⁾に身をおいてみると、そこは経験したことはあっても長時間かぐことはあまりないにおいの空間であり、ドラッグで捕まる兄弟や友人がおり、ちょっとした危険とも出あう場所である。陽の高いうちからアルコールのボトル片手に道端で談笑する男性たちとも交流できて、裸足で歩きまわれる所でもある。とある家屋では屋根に穴があき、壁には隙間があり、犬が自由に出入りする扉はダンボールで、床は土がむき出しになっている。

そこに暮らす人びとは「怠惰でろくに仕事もしない人びとであるが、しかし援助活動や介入をとおして救済すべき人びと」として、政府や国内外の NGO や宗教団体によって「介入」され、「開発」されている。本論文ではチリ・サンチャゴ市における貧困地区の調査をもとに、貧困者の身体とくに時間感覚に注目しつつその「第四世界」的なありかたについて考察し、実践的介入に関する視点を提言したい。

II. サンチャゴにおける貧困の諸相

II-1 基礎資料

サンチャゴ市の人口は2001年現在、6百1万3千185であり、チリ総人口²⁾の約40%が集中しており、そのうちサンチャゴ市人口の23.2%が貧困層に分類される。そして、チリ全国の貧困層の84%、極貧層の79%がサンチャゴに集中している(2000年 CASEN)。チリにおいては、経済指数によって階層が分類されており、極貧層³⁾、貧困層⁴⁾、中流層、上流層に分けられる。首都圏在住の場合の世帯の1人あたりの月々の収入が34,272ペソ(約5,700円)以下、極貧層とは世帯の1人当たりの収入が17,136ペソ(約2,800円)以下をいう(2002年現在)。

II-2 貧困の暫定的3類型

チリでは第二次世界大戦以降、とくに1960年代に入ってから、農村部からサンチャゴ市内への人口の移動が急速にすすみ、同時に土地の不法占拠による貧困地区が数多く誕生した。そして、1970年代の社会主義政権の樹立とその崩壊、その後の軍政による不法占拠地区の整備と経済の急成長、1990年代に入ってから民主化の経験という歴史的経過のなかでは、左派勢力が組織した結束力が根づく貧困地区があるいっぽうで、軍事政府の介入を積極的に受ける貧困地区も出てくるようになった。貧困外部からの介入の度合いの違いから、複数のレベルの、異なった性質の貧困が混在することとなり、それらは地理的にも、市内や郊外の一箇所にまとまることなく、まばらに点在している。これらの等質でない複数の貧困がどのように存在しているかについては紙面の都合上割愛するが、少なくとも次の3つの傾向性があり、それらにしたがって暫定的に類型化することが可能と思われる。

i. 貧困の再生産サイクル埋没型

生活戦略=サバイバル/その日のニーズに忠実で計画性・投資観念をもたない

ii. 貧困の再生産サイクル浮遊型

生活戦略=人なみの生活/効果が可視的な範囲での、短期的投資を行う

iii. 貧困の再生産サイクル離床型

生活戦略=自立自尊/効果が可視的ではなくとも長期的投資に価値をおく

この3つを貧困再生産サイクルからの脱却という視点から見ると、それぞれが異なる段階にあると見ることができ、現在進行形での段階的並存といえるのかもしれない。この3段階の間にある違いとしてもっとも大きいと想定されるのは、時間感覚とそれに伴う計画性のありようである。投資という実践を例にとってみると、埋没型では投資的実践は行われにくく、その日のニーズに最大の関心が寄せられる。浮遊型では効果が目に見える

短期的なものであれば投資を行い、離床型では身近な成功モデルを参照しつつ、たとえ長期にわたる投資になるとしてもモデルに倣ってみる、という態度の違いがある。

そして埋没型の人びとに見られる時間感覚こそが、われわれ貧困外部にいる人間にとって馴染まないと感じる点のひとつである。そこで本稿では、「貧困の再生産サイクル埋没型」と暫定的に分類した人びとに焦点をあて、貧困下において構築される身体について、時間との関わりから検討する。具体的な事例検討をまえに、次では事例を分析するための視点を提示しておきたい。

III. 貧困のハビトゥス

これまで、文化人類学における貧困研究では1960年代にO. ルイスによって「貧困の文化」という概念が提出されて以降、世界各地の貧困の報告と「貧困の文化概念」の妥当性が議論されるほか、「貧困の文化」への批判がなされてきた。筆者はルイスの「調査する者とされる者がひとつの世界を共有する」という貧困者への態度に共感しており、かつ、「貧困者は秩序が混乱しているとか、何か欠如しているとか、経済的困窮しているばかりでなく、それがあつたために貧困が再生産される」と主張した点を評価すべきだと考える。

しかしルイスが提出した「貧困の文化」とは、貧困の客観的な特徴とその生成条件を言いあてたものであるから、時代の流れとともに書き換えられるべきものだともいえる。筆者が目当たりしているサンチャゴ市における貧困も、またいずれの社会における貧困もおそらく、常に変化しているからである。筆者の体験した例であれば、1週間あいだをおいて同じ家を訪ねてみると、部屋の間取りが変わっていたり、夫が行方不明になっていたたり、息子が服役していたりする。もっと大きい世界的な流れでいえば、グローバル化という歴史の動きのなかで貧困も近代化・現代化している。例をあげるなら、テレビはいまや貧困地区の生活必需品の地位を確立しており、貧困者は現金が手元に入ってきたら何よりも先にラジオを買い、金額に応じてテレビを求める。しかしその音声や画面からは彼らの現実とはかけ離れた情報が頻繁に入ってくる。たとえばシェイプアップのためのマシンの宣伝ひとつをとっても、シェイプアップ

の何たるかを貧困者が共有しないことから始まり、そのマシンの金額に驚き、マシンの動作音が静かだという売り文句が何ゆえかわからず、マシンに必要なスペースは貧困者の生活空間の半分を占めてしまうかもしれないことを知る。

このようなまったく自分たちの生活に馴染まないようなものを情報として得ることは、その情報が有益になるような外部が実際にあるということ、彼らに強烈に認識させる。現実世界と情報の溝が創りだしているともいえる、そうした一連の変化が貧困地区にも起こっている。

貧困の場に身をおいて実感するのは、貧困の生活とはある種の拘束性をもつ反面、そこにはまってしまうと、その場につかたまま人を安住させてしまう引力があるように見えることである。こうした気楽さと奇妙な安心感ともいえるこの引力や、貧困の日常生活の内部で起こっている流動性や、日常生活の積み重ねによって生み出され、構築されているはずの彼らの感覚や身体性をとらえるには、P. プルデュのいうハビトゥスという概念が有効であろう。貧困という環境下において構築される身体やその感覚とはいかなるもので、その身体をとおして貧困者はいかなるリアリティを構築しているのか。貧困者の日常実践とそれを通じて形成される心的傾向を内在させた身体に焦点をあてる分析概念をここでは「貧困のハビトゥス」と呼ぶことにする。「貧困のハビトゥス」とは、P. プルデュのハビトゥス概念に従い、次のように定義できる。

「あるもの（たとえば投資）への価値観や心的状況、貧困者たちが置かれている状況すべてがからみあつて行われる実践があるとき、それをうながしている背景にあるものを「貧困のハビトゥス」と呼んでおく。ハビトゥスは過去の生存状況から形成され、現在の生存状況を反映し、実践をかたちづけている（方向づける）傾向性の総体である。」

この貧困のハビトゥスを想定しつつ、次章からの事例を考察する。事例はサンチャゴ市東南部に位置する、ペニャロレン区という自治区のなかのサンルイス地区ポブラシオン・ビジャ・ガルバリーノ（以下、VGと略す）である⁵⁾。

IV. 貧困のハビトウスの生成・再生産現場

IV-1 貧困者の生活サイクル

サンルイスの貧困地区に住む人びととの会話においては、特別にたずねているわけでもないのに、「毎日が同じように過ぎていって、何もすることがない。」「毎日同じだ、なにかコシータがあるだけだ」と語るのをよく耳にする。彼らがコシータ(ちいさな出来事)というものには、子供が風邪をひいたことや、応援しているサッカーチームが勝ったこと、犬が帰ってこないこと、自分の体調がすぐれないこと、しばらく夫が帰ってこないことなどがある。こうした日常は貧困者に限らず、貧困外部の人間の生活のなかでも普通に起こりうる。しかし貧困外部にいる者はそのあたりまえのことを、貧困者たちがいうほど「相変わらず同じ毎日」として取り沙汰しない。貧困者は貧困外部にいる者よりも毎日が同じだという意識が強いらしいというのが筆者の実感である。何がかれらに同じ毎日という感覚を持たせるのか、時間まつわる問題を考えるため、具体的に VG の人びとの生活サイクルをみてゆきたい。次に挙げる 5 つの事例は、いずれもサンルイス地区居住者であり、経済指標からして貧困層または極貧層に分類され、ダンボール回収によって生計をたてている人びとである。

2001年 6 月 27 日 曇り

① (E. D. 28歳 約 \$ 48,000/月)

家長で扶養家族 3 人)

今日は 9 時頃目が覚めた。冬場は寒くて、用を足しに行きたくなるから早起きになる。エクストラスーパー(スーパーの名前)は開店直後に行ったほうがダンボールを集めやすい。でも今日は昨日の残りのポロト(豆スープ)を食べて出たから、スーパーに着いたのは昼過ぎだった。大きいダンボールは 3 つしかなかった。でも帰りにワインのボトルを 5 本見つけたから良かったな。今日はもう終わりだ。もうちょっとしたら子供を学校へ迎えにいって、広場でサッカーする約束なんだ。でもあんまり動くとお腹がすくからそこそこにする。

② (H. M. 19歳 約 \$ 40,000/月)

家長で扶養家族 2 人)

今日は彼女(20歳の同居人)に 12 時に起こさ

れた。曇っているうちにダンボールを集めて来いっていわれて。雨が降ると寒くなるし出たくない。それに濡れたダンボールはほんとに重たいんだ。ソパイピージャ(揚げパン)を食べながら区役所の裏まで行ってきた。自動販売機の搬入車からダンボールをもらえた。24 缶用が 5 枚。帰りにいつも行くキオスクで中くらいののを 2 枚集めた。水曜日はどこもあんまり置いてない。今日は別に予定はないよ。

③ (J. S. 40歳 \$ 約 40,000/月)

家長で扶養家族 4 人)

自分は 11 時に目が覚めたけど、寒いからベッドの中でテレビをみていた。ダンボールはこれから集めに行くかどうか迷っているところだ。行こうとしたら友達がこうして話していたから、それに加わっていて行きそびれてるんだ。でも蓄えがないから行くべきだ。

2001年 7 月 4 日 15 時 小雨

④ (R. M. 38歳 \$ 30,000/月)

家長で扶養家族は母親 1 人)

今日は 10 時ころ起きたと思う。いつも見ている番組が途中だったから 10 時半かもしれない、わからない。妻がいなくなったから家に何も無い。時計も持って行ってしまった。(出て行ったのは)夏の終わりだったから、もう 3 ヶ月前かな。ダンボールについては、自分は一輪車しか持ってないから、たくさんは集められない。今日はエクストラに 2 枚しかなかったから、集めるのをやめて、甥の三輪車を借りて先週集めた分を売ってきた。全部で 4,000 ペソちょっとになった。今夜は牛肉を食べることもできる。でもまずパンを買わなくちゃいけない。今日はこれからショッピングだ。

2001年 7 月 5 日 曇りのち雨

⑤ (C. A. 52歳 約 \$ 40,000/月)

家長で扶養家族 3 人)

11 時に目が覚めたけどお腹が痛かったから休んでいた。でも雨が漏るから屋根を修理しなくちゃいけない、塞ぐためのビニールをさがしてきた。スーパーに行っただけダンボールには出会えなかった。これから屋根を直すために友だちを呼びに行くところだ。ダンボールは先週比較的集めたから今週はそこそこでも生きてい

ける。

IV-2 貧困下における「時間のハビトゥス」

これらの事例から、VGの人びとの日常の実践の特徴として以下の4つを言えるだろう。①労働に限らず、食事や家事全般においても決まった時間に何かをするという毎日のルーティーンがないこと、②時間的拘束がないこと、③労働日と休息日の区別がないこと、④行動範囲はスーパー・友人宅・区役所・ダンボール収集場といったいずれも徒歩20分圏内であること、いいかえると労働の1サイクル=労働への集中が持続する目安、である。

学校教育を相対的に早く脱落してしまいがちな彼ら⁶⁾は、資本主義社会に見合った規律訓練をうけておらず、また、定職を持って働く親や近隣者を持つことも少ない場合が多い。子供が学校へ行かなくなる理由には大きく2つあり、ひとつは制服のサイズが合っていないか汚かったり、必要な文具がなかったりするため、もうひとつは、こどもが学校で何をするのにも「もたつく」からだという。時間内に食事や作業を終えられないことで教師に注意を受け、劣等生のレッテルを貼られるうちに通学が面倒になる。子供が多いために2部から3部制で通学しているチリの子供たちは、朝起きて学校へ行く、というルーティーンがない子供も多い。子供だけでなく貧困の暮らしをする人びとの毎日の生活は「気まま」に過ぎ、起きる時間はまちまちで、気分で行動を決められ、時間に拘束されることのない毎日の繰り返しから形成されたハビトゥスを身につけていると考えられる。

それが「貧困のハビトゥス」のひとつとしての「時間のハビトゥス」である。

ダンボールを集めれば最低限の食料は確保できるから、とくに仕事を探すということはなく、彼らなりの仕事をしていない時間は仲間と雑談し、遊ぶ。差し迫って必要がない時は仕事よりも他を優先させ、明日に向かって余剰を蓄積するような実践はしない。したがって、昨日より今日、今日より明日の生活を変えようという努力が企てられることは稀になる。こうした蓄積の不在は、貧困下における時間のハビトゥスによって産み出され、蓄積の不在によってまた時間のハビトゥスが形作られ、ハビトゥスはより強固になってゆく。こうしたプロセスによって毎日が同じだという感覚が

生まれているのではないだろうか。

ブルデュは下層プロレタリアートは夢を見ることしかできず、その想像と現実の間の溝が大きいと述べているが、チリの現実では、蓄積を必要とするような職業に就いて金持ちになるといった非現実的な夢について言及することは少ない。彼らの夢をたずねたときそれは極めて現実的で、天井を張り替えられればいいのか、病気になれるような暇が欲しい、といった手に届く範囲のことを答える。こうした態度もおそらく彼らの、蓄積とは無縁に近いところにある時間感覚に関係しているのではないだろうか。

IV-3 再生産概念としてのハビトゥス

以上のような時間感覚を想定すると、もし何か貧困の再生産サイクルに働きかけるような新しい導入物や参照物があつたとしても、彼らの時間のハビトゥスは容易にそれを受け入れないように見える。VGに住む20歳女性KはVGの男たちについて次のように話す。

「とにかく怠け者なの。好きなときに働くのがあたりまえだから。機会があれば働くというアイデアがないの。ソーシャルワーカーが仕事をもってきてくれてもそれを利用しないの。だからソーシャルワーカーだって飽きちゃってもう持ってきてくれなくなる。好きなのよ、こういうふう生きるのが。貧しい人間の全体ではないけど、一部でもない、多くがそうね。頭が閉じちゃってるのね。」と。

これはたんに雇用機会を増やしただけでは、貧困の解消につながるわけではないことを示している。貧困克服計画を立案する時には、貧困者の時間のハビトゥスを考慮した内容が必要であろう。新しい生活条件を受け入れる時に生じるさまざまなコスト—決まった起床時間や定時出勤、8時間労働に慣れる努力や理解の必要性などを払ったとして、本当に貧困の克服が達成されるのか、それはどのように幸福な生活なのか。これまでの不便でも慣れた生活と、あらゆる面で予測不可能な「貧困克服」の魅力との綱引きの結果、より安易な方向へ、つまり過去に経験してきた「経路依存」⁷⁾の方向へ流れてしまう可能性が高いのは自然なことでもある。貧困に生きる人びとは、貧困の克服とは良いものだとか聞かされても、いざ選択を迫られたとき、予測不可能ななにかに投資するよりは

生存可能な従来の暮らしを選んでいる。その意味では、この経路依存という傾向性も、貧困者と外部とのかかわりをブロックする理由となっている。

そして彼らが経路依存する大きな要因として考えられることの一つに、「貧困の克服」が彼らを魅きつけない点を指摘できる。彼らには、いまある形での「貧困の克服」が必要ないのかもしれない。彼らは最底辺といわれようと、多くを望むことができにくかろうと、少なくとも彼らなりの方法で生きていくことができる。むしろ、貧困を克服せよと提言するのは、貧困の外部にいる人間である。そうだとすると、ここまで述べてきたような、貧困下に育まれる時間のハビトゥスとは、彼らの生き方そのものを形づくって、受け入れにくいもの（たとえば貧困克服計画）を取り入れずに、彼らの生活の仕方を再生産していくものといえる。そして、その再生産には時間のハビトゥスが大きくかかわっている。

文化人類学者の田辺繁治によると、ブルデュはハビトゥスという概念をとおして、「文化的に構築された環境に対する身体をもった個人の相互作用に光をあてた点では、文化を単純に集合的、社会的な表象とみなす従来の社会学をはるかにのりこえている」が、しかし「ハビトゥスが身体のなかにどのように刻み込まれるかはほとんど分析されることがない」[田辺 2003]。つまり、ハビトゥスというブラックボックスに入れてしまった、というのが批判の論点である。たしかに、ハビトゥスを想定した以上、ハビトゥスとそれを取りまく日常の出来事をからめて人間や社会をとらえていく必要がある。ハビトゥスとはあくまで貧困者の日常実践や生活から推測された存在にすぎないからである。つまり、実際の実践の理解に欠かせないものであると同時に、ハビトゥスはつねに実践によって変わっていく可能性があるものであるから、いつも可視的な行為を参照することを必要とする。その意味では、ハビトゥスとは再生産についての概念であり、詳らかな実践の参照をとおしてブラックボックスを免れる方法をさぐる余地はあるだろう。

V. 「出来事時間」と「時計時間」

本稿では、VGの貧困者たちの日常を具体的に考察することによって、その日常実践をとおし

て構築され、再生産される時間に関するハビトゥスを検討してきた。この貧困者のもつ時間感覚の傾向を表現する時間のハビトゥスのことを、「出来事時間 [レーヴィン 2002] のハビトゥス」と呼びたいと思う。社会心理学者のレーヴィンによれば「出来事時間」とは、「行動自体の成り行きにしたがって組み立てられる時間」をいい、「人間が、時計に示された時刻を使って行動の始まりと終わりを予定する」ものを「時計時間」という。

VGでの日常には、出来事時間に沿った生活の流れがあり、出来事を中心に実践が行われる。目覚めた時が一日の始まりであり、雑談をしておいたときが仕事への行き時であり、腹痛がおさまったときが起き時なのである。これに対して、資本主義社会の主流に適應して生活しているわれわれが馴染んでいるのが「時計時間のハビトゥス」である。

もちろん、これらの出来事時間と時計時間のふたつのハビトゥスははっきりと二分されるものではない。われわれの日常を考えても、混在可能な傾向性である。したがって、「出来事時間のハビトゥス」それ自体が貧困埋没型の必要条件ではない。しかし「出来事時間のハビトゥス」が再生産をくりかえして傾向性を強化し、そこに住む人びとの感覚の主流をなしてVGの貧困空間を形づくる、ということには差し支えないだろう。主流の違うふたつのハビトゥスの出会いとすれ違いを具体的に見るとすると、次のような場面がある。

ペニャロレン区役所のソーシャルワーカーは週に1度以上、必要に応じて担当地区の家庭訪問をするほか、担当家族をオフィスに呼んで補助金手続きの申請補助をしたり、相談を受けたりする。そのため、たびたび貧困者に「何時にわたしのオフィスにきて」という約束をする。しかし、貧困者たちはすっぽかすか大幅に遅れてくることが多い。彼らは友人宅にいたままこないか、途中で夫の参加する草サッカーを見ていて遅れる。ソーシャルワーカーが時間を指定した裏には、その時間であれば手続きが可能である、という意味が含まれており、そのことを彼らに伝えても繰り返し守られることのない約束がなされている。

貧困者にとっての物事のプラオリティの順序は、ソーシャルワーカーが思うものとは全く異なる。それは貧困下に育まれたハビトゥスによって方向づけられているからである。

先のKの話のように、機会に応じて働くということをしなくても、この出来事時間ハピトゥスに関わるといえる。出来事時間に慣れた身体にとって、時計時間で生きることは息苦しい。先に述べたように、学校教育や規律訓練とは離れたところでの生活では時計時間を身につける機会も少なく、さらにVGのような貧困の再生産サイクルに埋没した環境にある貧困下においては、時計時間で生きることは無意味かもしれない。貧困の日常において、われわれが「気まま」とか「自由」あるいは「自堕落」と呼ぶ、時間的拘束のゆるい生活が存在しているのは確かだが、その善悪を説くまえに、何が貧困であり、何が貧困の克服であるのか、根底から考え直すことが必要である。

VI. おわりに一貧困概念の再検討へー

最後に、貧困の克服というものはおしなべて外部の人間が言っているという点について述べたい。本稿を含めて、貧困についての研究は資本主義的視点のバイアスから逃れにくい。先に記した日常実践の特徴にかんしても、「〇〇がない」という否定的な言い方は資本主義的価値観にほかならない。こうした固定した価値観のなかで自明化した「貧困」について検討する展望を記すことで、本稿の結びとしたい。

筆者の扱う貧困とは、都市内部の貧困であり、イメージとしては劣悪な居住環境や、犯罪やドラッグが横行する悪の溜まり場というようなものである。いわゆる食糧難や飢餓などの直接的に生命の危機に結びつくような貧困とは異なる。生命の危機に結びつくような貧困とは食べられないことであり、人間の生命に関わるものだから、その場合の貧困は悪であり克服され援助されてしかるべきだろう。しかし都市の場合は少し異なる。犯罪が多発し、都市内部の悪の溜まり場ようになっており、恥の部分として表出する。チリのピノチェ將軍はかつて、各国のVIPがくる時には空港からの道についたてをたてた。

すこし視点をずらしたところから入ると、これまで先進諸国は開発や発展ということばを用いて中進国や開発途上国を色々なかたちで援助してきた。しかし、たいいていの援助は第三世界の特権階級に働きかけており、お金を出す代わりに一定の条件を出している。この方法では結局のところ中

進国や開発途上国が自立する形での発展はむづかしい。自立しうる経済力を生み出さない、新しい形の従属ともいえるだろう。そうしないためには、国家内計画の援助をしなければならない。しかしこの種の従属はレベルをかえて国家内でも起こっているのが現実であり、たとえば政府や自治体が自国内の貧困地区に介入する時、彼らの決めた貧困の克服像が描かれているのである。

実際に貧困者の友人と話しているとき、ドラッグの取引で詐欺を働いたというエピソードや、取引をめぐる頃に傷をおったことなど、彼らの悩みや日常についてよく聞く。ドラッグや刃傷沙汰という内容はともかく、日常的な感情の持ち方や悩み方自体はわれわれと変わらない。それにもかかわらず、われわれ時計時間になれた身体を育んできた人間は、彼らに特徴的な悪を見出し、その悪からの脱却のさきに、時計時間のくらしを描いている。貧困とは悪であるのか、その根本を問うと同時に、悪とされる場面を検討し、接触可能なながらも、われわれの想像とは「別の」世界を生きる貧困者を再考するべきであろう。

付記

本研究におけるフィールドワークは国際協力事業団(現国際協力機構)任務による調査ならびに庭野平和財団による助成によって実現したものである。こうした機会を与えていただいた両団に深くお礼申し上げたい。

注

- 1) 貧困地区とは、チリの経済的指標にしたがって分類される貧困層・極貧層が集合して居住する地区である。チリでは区(コムーナ)の下位にあたる居住区をセクトール、さらにその下位のまとまりをポブラシオンといい、同じポブラシオン居住者は大体同じレベルの経済階層にある場合が多い。したがって、本論文で貧困地区といった場合には、貧困率の高いポブラシオンを指している。
- 2) チリ全人口 1,505万341(2002年)、チリ最低賃金 111,200ペソ/月(2002年)※ 1 USドル=約706ペソ(2003年5月)、チリ全国失業率9.4%(2001年)、サンチャゴ市失業率18.9%(2001年)、サンチャゴ市貧困率23.2%(2001年)=極貧層17.4%・貧困層5.8%(MIDEPLAN チリ企画協力省2001年・INEチリ国

家統計局資料2002年より)

- 3) 生存に最低限必要な栄養を満たすための食料品の価格、基本的必要を満たすための非食料の価格合計額を極貧ラインという。世帯における一人当たりの収入が極貧ライン以下にある場合、極貧層に分類される。チリ国家統計局で定められている数値では、首都圏在住：17,136ペソ以下の収入/月、農村部在住：13,204ペソ以下の収入/月となっている。
- 4) 極貧ラインの2倍額（農村部の場合は1.75倍）を貧困ラインとし、世帯における一人当たりの収入が貧困ライン以下にある場合、貧困層に分類される。（首都圏在住：34,272ペソ以下の収入/月、農村部在住：23,108ペソ以下の収入/月）
- 5) ペニャロレン区は人口21万6千296(うち極貧層約9,000人、貧困層約32,000人；区の総人口の約20%)であり、その失業率は12.13%(2002年)である。そのなかのサンルイス地区の人口は48,168人(2002年)であり、区の総人口の22.3%を占め、サンルイスはヴィジャ・ガルバリノ (Villa Galvarino) とヴィジャ・レテリエル (Villa Letelier) のふたつのポブレーションから構成されている。サンルイスの貧困率の内訳は、貧困層37.85%、極貧層12.45%(2002年)である。
- 6) サンルイス地区における家長の教育歴：無教育11%、初等教育経験46.1%、初等教育修了17.7%、中等教育経験16.1%、中等教育修了9.1%、高等教育経験・修了ともに0%、識字率：51.62%
- 7) 経路依存とは何かの選択場面でこれまでに経験してきた事柄について過去の経路や経験に依存してし

まうという経済学の概念である。

参考文献

- 田辺繁治 2002『日常の実践のエスノグラフィ』世界思想社。
- 2003『生き方の人類学』講談社現代新書。
- A. セン 1999 [1999]『不平等の再検討』(池本幸生他訳) 岩波書店。
- P. プルデュ 1993 [1977]『資本主義のハビトゥス』(原山哲訳) 藤原書店。
- R. レーヴィン 2002 [2000]『あなたはどれだけ待てますか』(忠平美幸訳)、草思社。

資料

- Ministerio de Planificacion y Cooperacion: Division Social, *Pobreza y distribucion del ingreso en Chile, 2001: Resultados de la encuesta de caracterizacion socioeconomica nacional*, Julio de 2001, MIDEPLAN, Chile
- Ministerio de Planificacion y Cooperacion: *Balance de seis anos de las politicas sociales, 1996-2002*, Agosto de 2002, MIDEPLAN, Chile
- SECPLAC: *Antecedentes comunales de Penalolen 2001-2002*, Enero de 2003, SECPLAC, Chile
- Ilustre Municipalidad de San Ramon: *Gestion municipal '01*, Enero de 2002, Municipalidad de San Ramon, Chile